

神奈川県発掘調査成果発表会 2025

◆日時

令和7年7月19日（土）14：00～16：30

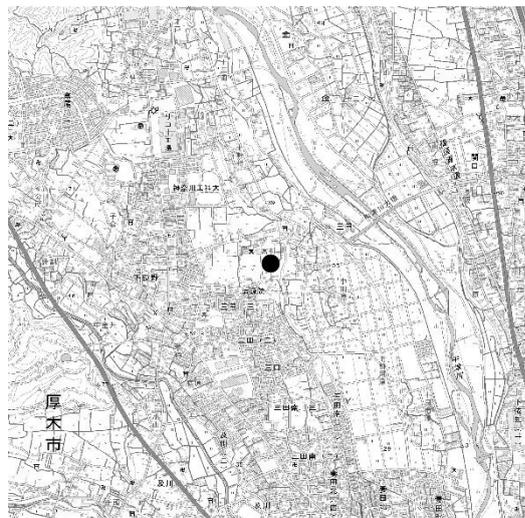
◆内容

- 「三田林根遺跡第6地点」（厚木市） ——— 1
 小山 裕之（株式会社玉川文化財研究所）
- 「河原口坊中遺跡第14次調査」（海老名市） ——— 3
 前川 昭彦（株式会社玉川文化財研究所）
- 「諏訪前A遺跡第20地点」（平塚市） ——— 5
 北平 朗久（株式会社玉川文化財研究所）
- 「子易・中川原遺跡第2次調査」（伊勢原市） ——— 7
 田村 典雄（睦合文化財株式会社）

三田林根遺跡第6地点

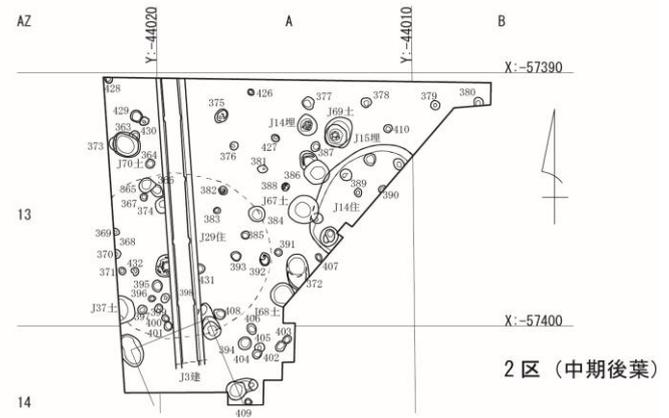
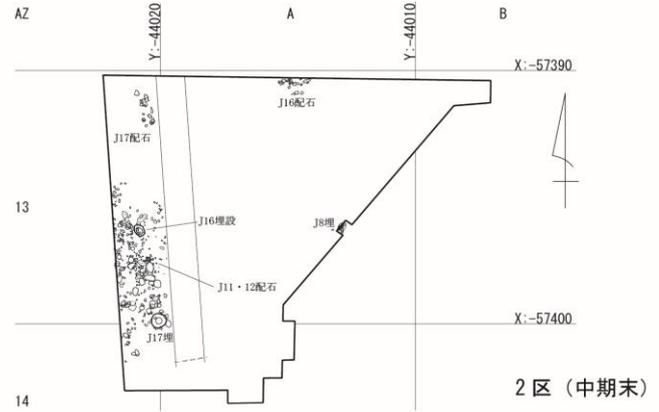
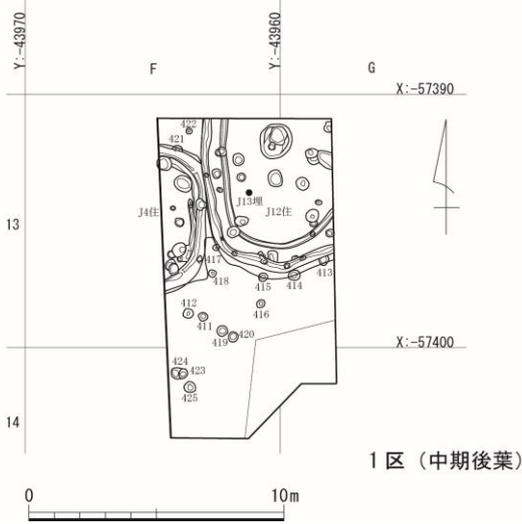
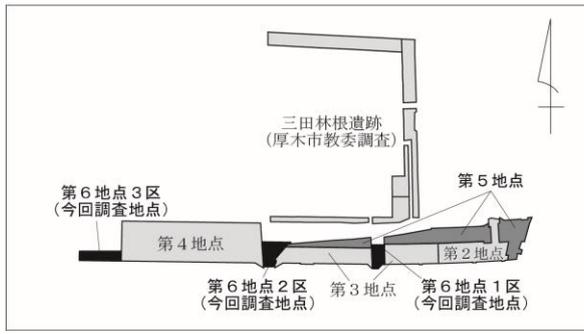
—縄文時代中期の拠点集落の調査—

所在地 厚木市三田字林根 461-3 ほか
調査機関 令和6年9月2日～令和7年2月21日
調査面積 約 437 m²
調査組織 株式会社玉川文化財研究所
担当者 小山裕之・坪田弘子



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

調査概要 三田林根遺跡は厚木市の北東部に位置する縄文時代中期の集落です。遺跡の東側には中津川、西側には荻野川が流れ、両河川に挟まれた荻野台地の平坦面から東側縁辺部に位置します。2015年から断続的に調査が行われ、今回が第6回目となります。調査区は1～3区に分かれており、縄文時代の遺構は1・2区から竪穴住居址4軒と掘立柱建物址1棟、配石遺構4基、埋設土器6基、土坑5基、ピット70基が検出されました。出土遺物は中期後半の土器・土製品・石器が遺物収納箱82箱分を数えます。配石遺構4基と埋甕1基は中期末の加曽利E4式期に属し、他の遺構は中期後半の加曽利E2～E3式期で、2つの時期に分かれます。中期後半の遺構をみていくと、1区からは深さが約70cmもある住居址が発見されました(写真1)。J12号住居址としたこの住居は加曽利E3式期に属します。北壁側が調査区外となり、長軸現存長6.3m、短軸現存長5.0mの大形住居址です。多数の遺物が出土し、床面上や覆土中から深鉢が逆さの状態が出土しました。また、覆土の下層からは大形の礫がまとまって出土し、その直下には焼土と灰からなる土層が堆積するなど、住居の埋没過程で何らかの意図的な行為がおこなわれた可能性があります。1区の西側約50mに位置する2区では、調査区の南側から掘立柱建物址1棟が検出されました。南側の調査区外に続いており、柱間の数は不明ですが、柱穴の規模が長軸1.2～1.4m、深さ50～83cmと大きいのが特徴です。西側に隣接する第4地点では1×1間の掘立柱建物址2棟が検出されており、集落の南西端にあたるエリアに建物が構築されていたようです。また、2区からは埋設土器が3基発見され、そのうちのJ14・15号は東西に隣り合って位置していました。東側のJ15号埋設土器の直下からはJ69号土坑が検出され、上下に重なる位置にあることが分かりました。J15号埋設土器は埋設した土器の下面に扁平な円礫を用いた配石を伴い、一方のJ69号土坑は覆土上層に通常はみられない焼土塊が多数含まれ、ともに特殊なあり方を示しています。中期末の遺構は2区でのみ検出されました。第4地点から続く配石遺構と埋設土器で構成されており、居住施設は発見されませんでした(第2図右上)。全体に遺構密度は低く、おそらく集落の縁辺部近くにあたる場所を調査したものと推定されます。(坪田弘子・小山裕之)



第2図 調査区位置図および1・2区縄文時代遺構配置図 (1/4,000、1/300)



写真1 J12号住居址 (南から)

河原口坊中遺跡第14次調査

— 弥生時代中期～古墳時代前期の集落と墓域の調査 —

所在地 海老名市河原口三丁目地内
調査期間 令和6年4月17日～令和7年2月28日
調査面積 358.314 m²
調査組織 株式会社玉川文化財研究所
担当者 小森明美・前川昭彦
調査概要 本遺跡は JR 相模線・小田急電鉄厚木駅の北約



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

1 kmに位置し、地勢的には相模川左岸に形成された自然堤防上、標高約 21～22mにかけて立地します。この一帯は海老名市No.52 遺跡として知られ、これまでの調査で、沖積微高地の本格的な土地利用が弥生時代中期後葉から始まったことが明らかとなっています。

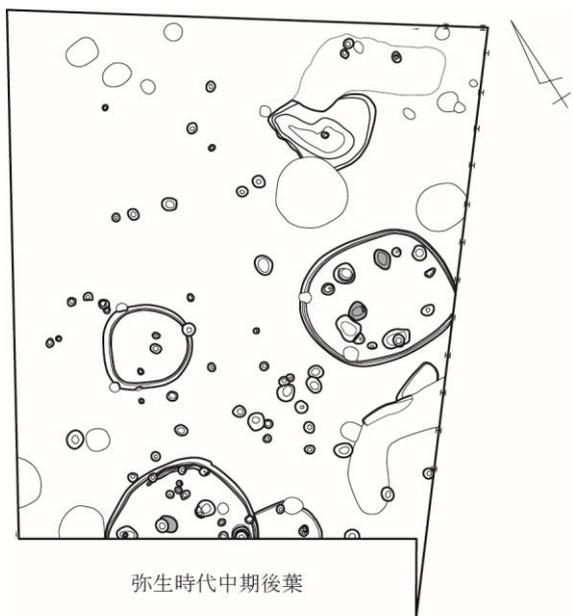
今回は弥生時代を中心に報告します。河原口坊中遺跡はこれまでの調査で、弥生時代中期後葉および弥生時代後期～古墳時代前期の集落や方形周溝墓群、そして旧河道などが既に発見されています。これらの調査成果を踏まえた今回の調査では、弥生時代中期後葉の竪穴住居址 4 軒、焼土址 1 基、土坑 28 基、ピット 187 基、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址 45 軒、方形周溝墓 2 基、焼土址 2 基、土坑 3 基、ピット 8 基を発見しました。遺構群は、No.52 遺跡の特に南側にあたる第 1・2・4・10 次調査の調査成果を補完する内容となっています。

弥生時代中期後葉の一番古い遺構は土坑およびピット群で、次いで竪穴住居址群が造られます。その後、人の活動の痕跡が見られない時期を挟み、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて再び集落や方形周溝墓を中心とした墓域が形成されます。この時期は竪穴住居址 45 軒が重層的に展開し、自然堆積土がどこにも残らないほど密集した状況です。また、方形周溝墓は重複関係において周囲の竪穴住居址より新しいことがわかりました。この弥生時代中期後葉から古墳時代前期にかけての土層の堆積は約 1 mに及んでおり、沖積微高地という地形の特徴を表していると言えます。

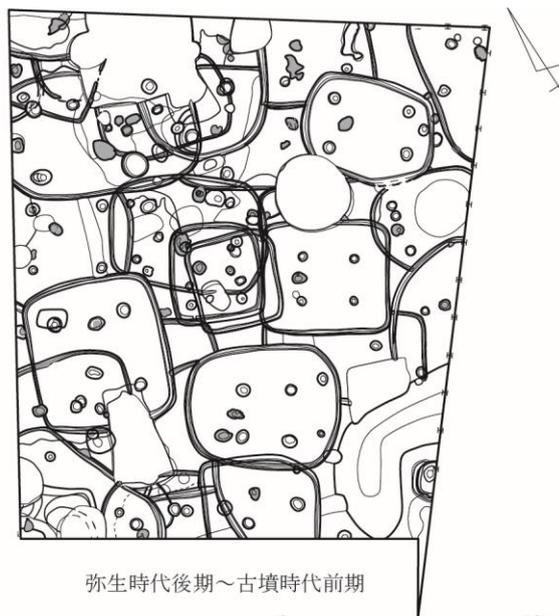
遺物としては、今次調査全体で遺物収納箱約 70 箱分が出土しています。その大半が弥生時代後期～古墳時代前期の遺物で、遺構数に比例した内容となります。当該期の土器や石器の他、竪穴住居址からは銅製の矢じり（銅鏃）なども発見されています。

まとめ 本調査区における弥生時代の竪穴住居址群は、河畔の沖積微高地に広がる集落の一部であり、特に弥生時代後期以降は中心域のひとつであったと考えられます。弥生時代中期～古墳時代前期の堆積が厚いこと、竪穴住居址が何度も造り替えられていることから、おそらく川の氾濫を何度も受けながら、それでも弥生人はこの微高地を繰り返し生活の場に利用したと考えられます。

(前川昭彦)



弥生時代中期後葉



弥生時代後期～古墳時代前期

第2図 遺構配置図 (1/300)



相模川
(手前が下流)



圏央道
(茅ヶ崎方面)



写真1 遺跡遠景 (南西から相模川上流を望む)



写真2 弥生時代中期後葉第2面全景 (北東から)



写真3 弥生時代後期～古墳時代前期全景 (北東から)

諏訪前A遺跡 第20地点

所在地 平塚市東真土二丁目243B及び223Bの一部
調査期間 令和6年4月23日～令和7年1月24日
調査面積 648.234㎡（1区580.452㎡、2区67.782㎡）
調査組織 株式会社玉川文化財研究所
担当者 北平朗久・高橋 歩・迫 和幸

調査概要 本遺跡の調査は、都市計画道路3・3・6号湘南新道街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施され、3面の遺構検出面が確認されました。1面から近世以降、2面から中世、3面から古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されました。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

近世以降 畝状遺構43条、土坑17基、ピット列3列、ピット74基が検出されました。畝状遺構は、東西方向と南北方向に延びるものに分けられ、各遺構の覆土には宝永火山灰が含まれるものがあります。

中世 畝状遺構5条、ピット51基を検出しましたが、遺構は相対的に少なく、中世の痕跡は僅かです。ピットから天聖元寶（北宋銭）が出土しました。

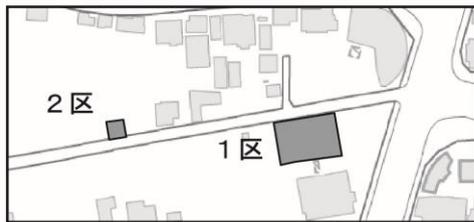
古墳時代後期～奈良・平安時代 竪穴住居址31軒、掘立柱建物址8棟、竪穴状遺構4基、溝状遺構4条、土坑150基、土壇墓2基、ピット700基が検出されました。1・2区ともに遺構が重複しながら密集しています。竪穴住居址は1区から26軒、2区から5軒が検出され、7世紀後半から10世紀代まで存続したと考えられます。掘立柱建物址は8棟が検出されましたが、遺構の重複や調査区範囲の影響などから全容が捉えられたものは少ないです。いずれも側柱建物と推定されますが、規模が把握できたものは2棟で、桁行3間×梁行2間の建物です。溝状遺構は東西方向と南北方向に延びるものに分けられ、H1号溝とH3号溝は直交関係にあることから、区画溝の可能性が考えられますが、攪乱や遺構の重複により壊された部分が多く、詳細は不明です。土壇墓は2基が検出されました。いずれも1区の南側に位置し、全体が検出できたのは1基です。頭部を北側にした座位の屈葬で、埋葬されていました。また、土坑の中には骨片や歯などが出土したのも2基あり、土壇墓の可能性が考えられます。

まとめ 諏訪前A遺跡第20地点からは、主に古墳時代後期から奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されました。今回の調査地点は相模国府推定域に含まれ、国府存続時期の竪穴住居址も検出されましたが、官衙的遺構や遺物が少ないことが指摘できます。当該地を含め、周辺には官衙関連の遺跡が多く存在しており、それらを検討する上でこの調査資料の追加は大きな成果と考えられます。

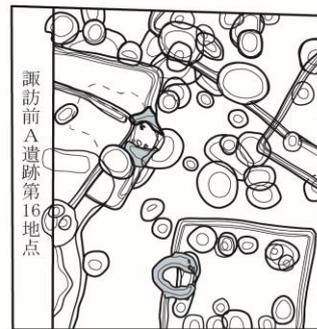
(北平朗久)



1区



調査区略図 (縮尺不同)



2区



第2図 古墳時代後期～奈良・平安時代 遺構配置図 (S=1/200)



写真1 1区古墳時代後期～奈良・平安時代全景 (南から)



写真2 2区古墳時代後期～奈良・平安時代全景 (西から)

こ や す な かが わ ら
子 易 ・ 中 川 原 遺 跡 第 2 次 調 査

所 在 地 伊勢原市子易 22 番地先

調 査 期 間 令和 6 年 9 月 2 日～令和 7 年 1 月 24 日

調 査 面 積 519 m²

調 査 組 織 睦合文化財株式会社

担 当 者 田村典雄・金箱文夫

調 査 概 要 本遺跡は、大山山塊の先端部に位置しています。調査区は鈴川の急勾配な谷部に面した急斜面とやや上にあがった緩斜面に立地しています。標高は 106m です。



第 1 図 遺跡位置図(1/50,000)

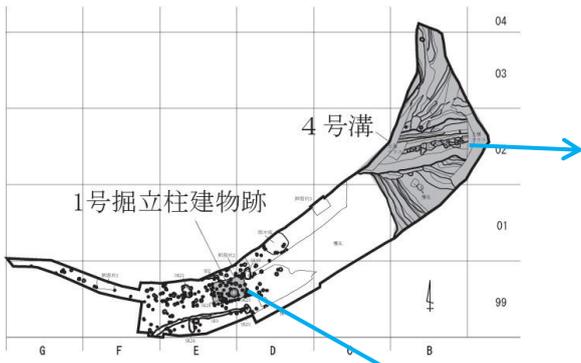
近世以降 18 世紀に入り、周辺地域では鈴川を水源とする用水路が造られたことが伝えられています。これに伴い周囲を含めて棚田が形成されたと推測しています。今回の調査で主要な遺構は、棚田を形造っていたと思われる石垣が発見されています。

中世 主要な遺構は、調査区西側に掘立柱建物跡が発見されています。建物の北東の柱から古い銅製の銭が出土しました。地鎮祭などに使われ埋納されたものと考えています。古銭には「景祐元寶」と書かれています。中国で北宋時代に鑄造（初鑄は1034年）されたものです。掘立柱建物跡の周囲からは溝・土坑・ピットが発見されています。溝は2条見つかかり、掘立柱建物跡の南と北にそれぞれ並んでいます。土坑は6基見つかっています。このうち18号土坑からは鎌倉時代のかわけが出土しました。このことから、掘立柱建物跡を中心とした周囲の遺構は鎌倉時代のものと推測しています。また、鈴川の急勾配な谷部に面した斜面に、鎌倉時代に構築されたであろう大溝が見つかりました。大溝は斜面の等高線に直行する方向に造られています。溝の底が硬くなっていたことから道として利用されていたことが判明しました。溝底の硬い土は段階的に厚さを増して、溝は順次拡幅しています。大溝周囲の斜面全体はローム層まで削られ階段状に造られていました。階段は大溝の下方に集中するように造られています。大溝に関わる役割を持っていたと考えています。

弥生時代 深さ約2mの落とし穴が発見されています。落とし穴の中からは、弥生時代前期末から中期前半の土器小片を出土しています。

縄文時代 主要な遺構は、竪穴住居跡4軒が発見されています。竪穴住居跡4軒からは後期前葉堀之内式の土器が出土しているため、この時期を中心とする集落の一部であると考えられます。竪穴住居跡4軒のうち1軒は敷石住居です。柄鏡形の形をしていて、床面に平な石が敷かれています。住居の中央には石で囲われた炉が設けられていました。炉は上下に重なっていることが判明し、上部は石囲い炉、下部は地床炉になっています。柱は住居跡の縁に沿って並んでいて、住居跡を拡張した様子を見ることができました。集落には土坑が集中する区域が見つかっており、集落内の場所毎の土地利用の違いを見ることができます。また、集落より古い時期の落とし穴が2基発見されており、竪穴住居跡を中心とした、集落が造られる以前の状況について資料を得ることができました。

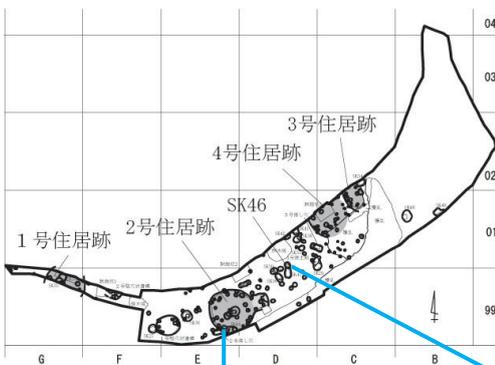
(田村典雄)



第2図 中世遺構配置図



写真1 4号溝 (南東から)



第3図 縄文時代遺構配置図



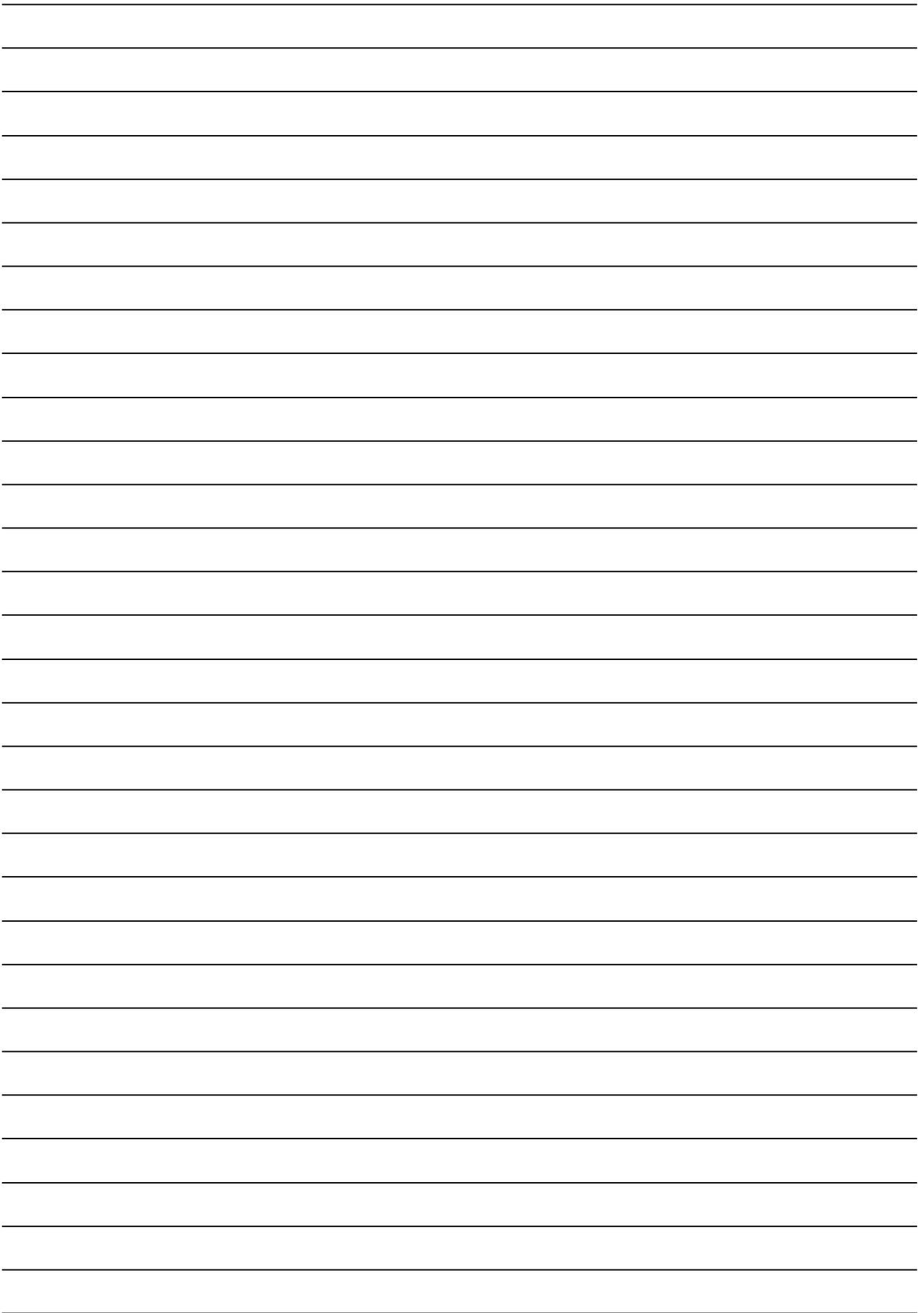
写真2 1号掘立柱建物跡 (南から)

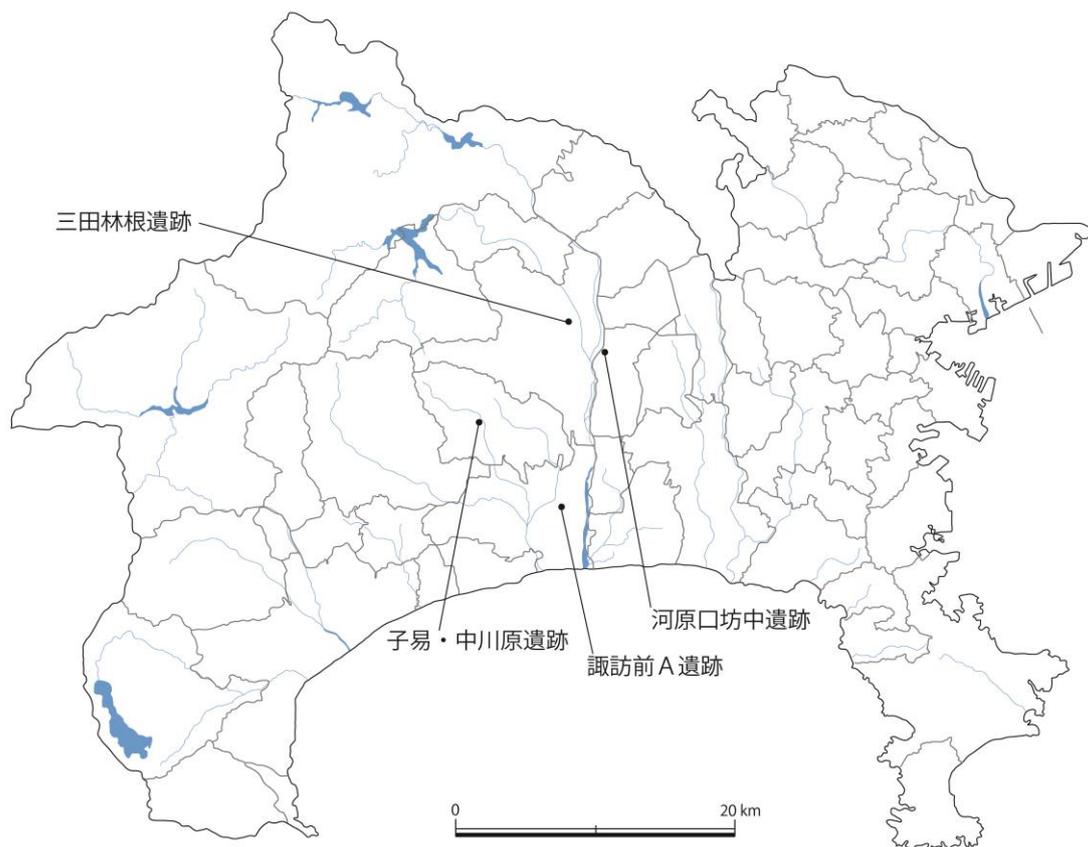


写真3 2号竪穴住居跡 (敷石住居) (北東から)



写真4 46号土坑遺物出土状況 (南から)





今回発表の遺跡

神奈川県発掘調査成果発表会は、神奈川県が行う事業に伴って実施された発掘調査の最新の成果を一般の方々に公開し、埋蔵文化財への理解を深めていただくことを目的にしています。